する人　　伊藤一彦

大震災での遺体に係わっている人たちなので、いずれも自らの任務、仕事として携わっているのだと思うが、中にはボランティアの方たちも含まれるのかも知れない。いずれにせよ、ただ羅列しているように見えて、とても力のある歌だ。

着実に言われたことをする人はロボットのようロボットはよし　　大島史洋

どこの職場にも、このような人がいる。詠み手は、言われたことだけをやっていればよいロボットを羨ましがっているのだろうか。それとも、相手に対して、あなたは人間なのだから、もっと考えて行動するように、と苦言を呈しているのだろうか。

共産党のポスターに写り居る少女ものを言わざるまま の微笑み　　浜田康敬

政党のポスターになっているわけだから、その写真は単なるスナップではなく、少女はモデルとして仕事をしたのだろう。作者は、その笑顔に好感を抱いていなさそうな感じが伝わってくる。

農機具庫のシャッター全て降ろし終へ仰げば星の瞬きてをり　　時田則雄

一日の作業の終わりが詠まれているのだろうか。いや、「全て」と強調されていることや、下句の表現からすると、一年の農作業を終了し、これから冬を迎えるという感慨を歌っているのだろう。

シクラメンの配置を換へてまた換へる花舗の人見てをり喫茶店より　　花山多佳子

仕事をしている姿は、他人から見ると、何だか無駄な行ないをしているように見えたりするものである。無為に時間を潰しているように感じられるのも、この作者らしい。

放射線の微光をおびて帰らむよ絹さやと油揚(あぶらげ)忘れぬやうに　　渡英子

〈今〉を詠んだ秀歌だと思う。「絹さやと油揚」は、味噌汁の具だろうか。買い物は、主婦の大切な労働である（今では主婦に限らないが）。

職やめて朝からビール呑みてをる無頼をゆるせさくら散るまで　　萩岡良博

この言い訳は、次々とネタを換えて繰り返されるのだろうか。「梅雨に入るまで」、「夏が去るまで」…、のように。

平安(たひらぎ)のなく定年を得たるとき子ら発ちてをり翔(と)ぶが子どもか　　伊勢方信

忙しい日々だったのだろう。どことなく達成感のようなものも滞っている。あと数年後、子どものいない私は、この感慨を味わえないのだが…。

何をして食べてゐるのか分からない叔父などがむかしどの家にもをりし　　黒木三千代

職業・労働の裏返しの歌として引いた。明治・大正の頃の高等遊民か。あるいは、昭和の戦後にもいたか。